

半島の発見

渡 邊 了 好

序

現在の半島は分断と混乱のただ中に在る。南北の分断だけでなく、大韓国内部も分裂している。1945年以降の米ソの干渉が無ければ分断分裂は無かったという観方は正しくない。1945年当時もそれ以前も、将来の国のあり方についての左右の対立と混乱は現在の大韓民国と同じであった。歴史をたどっても半島は王朝の力が衰えると分裂した。

日本人にとって、日本海の西方対岸にあるあの半島とは何か。日本人にとってどのような関係に在る地域か。その間に答えようと試みたのが本稿である。問の性格からして実証の論考ではない。

初めて韓国を訪れてからほぼ50年の間、見て考え、住んで考え、感じて考え、学んで考えた観方を記す。

1 半島の歴史は半島という地域の歴史である

1-1 半島に古代より時を越えて現在まで生き続ける歴史の主体となる集団は無い。

この稿の対象である半島の、全体もしくは、ある一部の地域にであっても、特定の集団（部族や国）が古代より今に至るまで、時を越えて存在して現在の大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国になっているなら「大韓民国の歴史」も「朝鮮民主主義人民共和国の歴史」も歴史の主体となる集団の歴史である。しかし、半島にそのよ

うな集団は無い。古代の朝鮮と現代の大韓民国が、高句麗と大韓民国が同一性を保って続いて来たとは考えられない。ましてや半島の北のかなりの部分を400年も統治した楽浪郡、玄菟郡、真番郡、臨屯郡などは外国の統治機構であった。それをも現在の北朝鮮の領土（韓国から見れば建前上北も大韓民国の領土）に成立したからという理由で大韓民国史として記述するなら、それは地域の歴史である。

箕子朝鮮、衛氏朝鮮、楽浪郡、玄菟郡、真番郡、臨屯郡、高句麗、百濟、新羅、後高句麗、後百濟、高麗、朝鮮、日本（朝鮮総督府）、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国と半島に存在して、半島の全体または、一部を統治したか、している主体を挙げたが、全てを貫く共通の本質を指し示して、総称する名称は何だろうか。私はいまだそれは無いと考えている。有るのは各統治の主体名と王朝名である。それ故、日本の総督府は地域の名称としての「朝鮮」を採用して「朝鮮総督府」としたのであろう。

箕子朝鮮、衛氏朝鮮、楽浪郡、玄菟郡、真番郡、臨屯郡は外国勢力の統治機構である。楽浪郡の支配は約400年に及び日本の30数年の統治とは比較にならない。その間、半島北部の住民は漢人と雑居し婚姻が行われ漢人の風が広まって漢文明化したであろうことは容易に想像できる。漢から遠い半島南部の現慶尚道や全羅道の住民とは全く異なる社会を形成していたはずである。更に、楽浪郡の地をも領土とした高句麗は、半島の北側の大陸にいた夫餘族の別種と言われ、言語も夫餘と同じと言われる。高句麗もまた、半島南部の新羅の人々とは全く異なる生活文化を持つ部族が建てた別の国であった。全く別の国であることを示すように、三国時代の高句麗、百濟、新羅はそれぞれ異なる建国神話を持っていた。^(注1)

新羅が半島全域を支配した時代、三国は連合王国の形をとらず、全て新羅となった。新羅の実態について、韓国的高等学校等の歴史教科書には、三国を統一した新羅は、異なる文化を持つ旧三国間の葛藤を解決するために努力したことが記述されている。具体的な葛藤が何であるかの記述は無いが、北方の騎馬を良くする人々と、南方の農耕民とでは生活文化と考え方や言語にも違いがあったはずである。

やがて新羅が衰えると、後高句麗、後百濟などと称する国々に分裂する後三国時

代となった。

それが高麗によって二度目の「統一」がなされ、更に朝鮮に受け継がれて行く。半島は朝鮮王朝の後、大韓帝国を経て日本の統治時代を迎えるのである。

朝鮮総督府は楽浪郡を始めとする四郡と同じく外国勢力が設置した統治機構であったが、朝鮮総督府の統治は半島に他に統治機構が無い状態で行われたのである。日本はこの時から半島の歴史の当事者の一人となった。

日本の統治が終わると、南に大韓民国、北に朝鮮民主主義人民共和国の二つの国が並立して現在に至っている。

現在の、韓国は通史を箕子朝鮮、衛氏朝鮮、楽浪郡、玄菟郡、真番郡、臨屯郡、から初めているが、これは大韓民国の歴史を書くという記述にはなり得ない。半島という地域の歴史記述であろう。

次は高句麗が大韓民国の歴史として記述されているが、高句麗が大韓民国であるうか。高句麗から大韓民国までを貫く何か太い流れがあると言えるのだろうか。現在から見た半島の過去を全て大韓民国であるというなら、高句麗が今まで何らかの形で継続性を保って大韓民国になっていると言えるだろうか。

そして朝鮮と大韓民国の間に存在した「朝鮮総督府の時代」をどう位置づけるのか。この時、半島は日本であり日本は半島であった。

1-1の最初の命題に戻ろう。半島には古代より今に至るまで、時を越えて継続して存在している集団は無く、様々な異質の集団が半島の一部または全てを統治して今に至っている。

半島の歴史を記述しようとする半島の名称をどうするかに関わり無く「地域の歴史」にならざるをえない。他にこのような例を探すと英国の歴史がある。

次は近藤和彦著『イギリス史 10 講』^(注2)の中の一節である。「イギリスは大昔にはヨーロッパ大陸と陸続きで、古代にはその半分はローマ帝国の属州となり、中世からヨーロッパのキリスト教と学問と政治の一端になった。」この文のイギリスを「半島」に、ヨーロッパ大陸を中華大陸に、ローマ帝国とヨーロッパを中華帝国に、キリスト教を儒教に置き換えて半島の歴史としても大きく

違わない。英国史もまたブリテン諸島の地域の歴史である。

2

現在の半島は分断と混乱の中にある。南北の分断だけでなく、韓国内部も既に分裂していることは序に述べた通りである。1945年以降に米ソの干渉が無ければ半島に分断分裂は無かったとする観方もあるが、当時も今も、解放後の国のあり方を巡る対立と混乱に変わりはない。当時対立していた勢力が今も対立しているからである。半島は力による統一を果たした王朝が衰える度に分裂と分断を繰り返して来た。

その理由は、半島の大方の人々が承認する統一の歴史的原理が欠けているからである。そこで、統一の歴史的原理とはどのようなものか見て行く。

2-1 『三国史記』

『三国史記』は高麗の儒者、金富軾が12世紀半ばに編纂した三国時代の正史である。高句麗、新羅、百済それぞれの建国神話、三国の争いが新羅の勝利に終わる過程を記している。金富軾は三国を半島にあった全く別の国として扱い、同源とはせず、半島の歴史を地域の歴史として述べている。もし、三国が同じ根から生じた同族という意識があったなら、血の繋がらぬ中華帝国と結んで兄弟である百済を滅ぼす新羅に対して何らかの批判があつてしかるべきであつたが、それは無かつた。金富軾は、百済は自業自得で滅びたという意味の批評をしている。

『三国史記』には、半島には統一への歴史的原理となり得るような、時を越えて統治するべき或る主体（部族、国など）が在るという考え方を見出す事はできない。

2-2 『三国遺事』

13世紀半ばに、僧一然が編纂したとされる『三国遺事』は野史ではあるが正史『三国史記』の「半島の地域の歴史」を「或る一つの主体の歴史」に書き換える力

を秘めた史書であった。その力の核心が檀君神話である。檀君神話を要約すれば以下のようなになる。

天帝桓因の庶子、桓雄が部下三千人を率いて太伯山に降り立ち人々を教化した。桓雄と（熊から人になった）熊女との間に檀君が生まれた。檀君は平壤を首都として国を開き国号を「朝鮮」と称した。1500年に渡って国を治めた。

この神話は半島の全ての人は檀君の統治を受けた人々の子孫であることを述べている。半島が一つでありそこに住む人々も皆一つの国の民であったという神話は、半島統一の根拠となり得るものであった。夫餘から出た高句麗も南の新羅も百済も全て同じ血を分けた兄弟ということになる。そして数百年の時を経て、檀君の即位の日は太陽暦の10月3日とされ、韓国では開天節として祝われているが、現実の半島の歴史は「地域の歴史」のままにとどまり統一に向かってはいない。檀君神話が統一の具体的原理とされなかったことについては、檀君神話の内部に不備があった事も否めない。それ故檀君神話を記した『三国遺事』は歴史を絶えず統一へと押し戻す『朝鮮書紀』となりえなかった。その不備が何であったか次の『日本書紀』との比較によって私の考えを述べる。

2-3 『日本書紀』

日本と半島の歴史の最大の違いは、日本に『日本書紀』があり半島には『三国史記』があつて『朝鮮書紀』が無かつたことである。

『日本書紀』には第一に、日本の国が神々によって作られる過程が示され、神々の子孫である天皇家の位置づけが明確に記されていることである。このことで日本は分かつことのできない一つの世界であることと共に天皇の支配者としての正当性も示されている。

第二に、神々の子孫であり日本を統治する正当性を持つ天皇を生身の人のの中に特定する役割を果たしていることである。誰が神々の子であるかが分かることによって、他の全ての人の上にある存在を登場させた。

半島に安定をもたらす中心を生み出すためには『三国遺事』は数百年早く出現す

るべきであったし、半島の民はみな兄弟であることを示すだけでなく、「檀君の子孫」が誰であるか特定して示さなければならなかった。指名された檀君の子孫は統一の象徴となり、誰もがそれを越えることのできない中心となる存在になったであろう。権威ある史書によって特定された「現人神」の欠如が半島から中心を奪い、安定した統一を奪い現在に至っている。大陸の皇帝は半島人にとっても絶対者であるが半島に乱立する王達は力による統一はできても理念による統一は実現できない。

(注3)

3 日本の統治時代

半島の歴史を地域の歴史として捉える他なくなってしまった決定的要因の一つは日本による統治の時代の存在である。朝鮮王朝までは檀君神話を利用する事で「朝鮮は一体」を説明することができないではない。しかし、明らかな異民族統治である日本の統治は檀君神話をもってしても如何ともし難い統治であった。

3-1 現代韓国における大韓民国建国論争

韓国には開天節（10月3日）という「建国記念日」がある。にもかかわらず、現在（2017）、韓国では大韓民国建国の時期をめぐる「大韓民国建国論争」という政治的論争が続いている。

1948年に建国されたとするのは現在の韓国では、主に保守派である。1948年5月10日に半島の南半分（現在の韓国）だけで行われた選挙ではあったが半島の歴史上初めて一人一票で行われた普通選挙であった。そこで選出された国会議員によって、三権分立と国会議員による間接選挙による大統領制を定めた憲法が制定され、同年7月に公布された。

初代大統領に李承晩が選出され1948年8月15日に大韓民国が成立した。更にその年の12月にはパリで開かれた国連の会議で半島における唯一の合法政権であることが承認された。これをもって大韓民国の建国としようという主張である。

これに対して1919年建国説を唱える人々がいる。この人々は上海に臨時政府が樹立された1919年をもって大韓民国の建国としようと主張している。

このような建国論争がある状況は、日本人にとっての半島の意味を考える上で非常に興味深く重要な手掛かりとなる。私はこの論争の根底に半島の歴史が「地域の歴史」として固定することへの反発があると考えている。

3-2 大韓民国建国論争の背景

現代韓国は「韓国史」を箕子朝鮮、衛氏朝鮮、楽浪郡、玄菟郡、真番郡、臨屯郡、高句麗、百濟、新羅、後高句麗、後百濟、高麗、朝鮮の全てが時を超え「韓民族という歴史の主体」が時の流れに応じて様々に王朝の形を変えて進めて来た「韓民族の歴史」として書こうとしている。無論現代の大韓民国もその延長にある。ところがせっかくの「韓民族という歴史の主体の進めて来た歴史」を「半島という地域の歴史」にしてしまうのが「日本の朝鮮総督府の時代」である。韓民族が主体となって進めていなかった時代があからさまであるからだ。その時代半島のどこにも総督府以外の統治機構が存在しないのであるから半島に日本という国があったことになる。

日常の様々な手続き、例えば、婚姻届け、出生証明、また、医師免許状や判・検事・弁護士・会計士などの資格等、様々な公的資格の根拠となるのが日本政府であり朝鮮総督府の裏書きのみであった。

檀君神話に由来する韓国の開天節は、日本の「建国記念の日」と共通した考え方による設定である。日本においても、古代から現代に至る全てが日本であり、日付は正確に特定できないとしても、日本が形成された日があるはずで、それを「建国記念の日」としたということであろう。このときできた日本が時の流れに合わせて形を変えつつ今の日本になったことになる。

従って日本では明治維新政府の樹立を明治日本の建国とは言わない。同様に江戸幕府建国とも言わない。韓国においてもこれまでの歴史記述においては大韓民国政府樹立または成立という用語であって「建国」という用語が使われることはなかつ

た。

大韓民国樹立を建国と唱えようという主張が現れたのは2000年代に入ってからのものである。保守に分類されるハンナラ党の議員達の間で光復節（8月15日）を建国節と呼ぼうという動きがあったが、実現しなかった。しかし、2008年に当選した李明博大統領は「建国60周年記念事業委員会」を組織し、建国という用語を使った。60周年ということは1948年建国説である。現文在寅政権は1919年建国説を支持している。

では大韓民国の建国を1919年としようとするのはどういう意図からであろうか。

3-3 「強制占領期」の登場

「韓民族が主体となって進めて来た半島の歴史」を守り「地域の歴史」を否定するために「日本の統治時代」を無かったことにしてしまう方法が登場したのである。

1970年代には外国人留学生に教える「韓国近現代史」でも韓国人教師が「日本時代」または「日帝時代」という用語を使っていた。^(注4) 2000年を過ぎた頃からであろうか一年間の韓国語研修を終えて帰国する学生達が、その時代を「強占期（強制占領期）」と習ったと言いだした。

1919年に樹立された上海臨時政府が大韓民国として在り、日本が本土の半島を占領していただけであるという表現である。朝鮮王朝から大韓帝国、更に上海にある大韓民国へと半島の歴史は一環して韓民族が主体となって進めていたということになる。そのためにはどうしても、大韓民国の建国は1919年でなければならないことになる。

私は、開天節で古代に建国を認めていながら、大韓民国建国というのは「韓民族の歴史的に一環した主体」を否定する事になると考えている。

地域の歴史というときこそ、新羅の建国、高麗の建国、朝鮮の建国、大韓帝国の建国、韓日合併、大韓民国の建国であろう。

4 日本人にとって半島とは何か

「日本人にとって半島とは何か」「半島は日本とどのような関係にあるか」という問に関して考えるべき時代は、古代の半島との関係も無視できないが、より重要なのは日本の統治時代である。この時代を通して日本人は半島の歴史を形成する当事者の一人となったからである。日本人とは何か、半島人とは何かという問もまた生まれて来る必然性のある問となった。言い換えれば「誰が日本人で誰が半島人か」という問ともなる。

4-1 2001年の歴史教科書問題

日本の統治時代を中心として、日本と半島はどのような関係にあるかを考えるために、2001年の日韓の歴史教科書問題をとりあげる。

2001年、韓国の新聞テレビを始めとする報道機関は、日本政府が歴史を歪曲して編纂したものを教科書として採択したとして、この問題を「日本の歴史歪曲教科書問題」と呼んで報道した。当時の韓国では国史の教科書は中学校、高等学校ともに国が編纂する国定教科書で一種類であった。日本では一定の基準を満たして検定に合格すれば、正式な教科書となるその事実を、マスコミ関係者が知らないはずはなかったが、当然日本も国定教科書であろうと考える国民の認識を訂正し日本の検定制度の説明をする報道は私の知る限り無かった。^(注5)

この時注目すべきは、韓国政府が日本政府に歴史記述の修正を要求したのが、世界史や韓国史の教科書でなく、日本史の教科書であったことである。日本人が自国の歴史を若い自国民に教えるための教科書の記述内容に具体的事例を挙げて書き換えるよう干渉したのである。

外国がその国の国民用に作った歴史教科書に当然のように干渉する意識はどこから出て来るのだろうか。私の考えを述べる。

この意識は日本の統治時代の半島の歴史を誰の歴史と考えるかというところから出て来るというのが私の考えである。韓国人たちは日本の統治時代を通して日本の

歴史を自分達に発言権の有る自分の歴史と考えるようになったのだということである。

当時の教科書問題で韓国政府の最も重要な修正要求は近現代の日本統治に関連するものであった。彼らは日本人から見ての当否はともかく、その時代に自分達の演じた役割と行動は日本人が半島の姿として、日本の歴史教科書に書いているようなものではなかったということ、共にその時代を構成していた日本人に言っているのだ。「日本史」の側から述べれば、半島の歴史は日本の歴史であったから、日本人は自分の歴史として半島の有様を描いた。彼ら半島人は自分自身が登場して歴史の一員として役割を果たした「日本史」の中の自身の描かれ方について、日本史の当事者（日本人）として納得がいかないと異議を唱えているのである。

日本の統治時代を経て半島の人間にとって、日本史は他国、外国の歴史ではなくなったということである。意識の上では日本は外国だが、実は外国ではない。

これは日本人の側からも同じことが言える。日本人の方がそれに気付いていないだけで日本の統治時代を経て半島の歴史は他国、外国の歴史ではなくなっているはずだからである。

記録に残っているだけで二千年に及ぶ半島の歴史の中で三十数年間は日本人が歴史の当事者であった。

日本人はこれまでそれを日本史として述べて来たが、日本人も日本史の当事者であるばかりでなく、半島の歴史の当事者の一人として自分の経験を、半島の歴史として述べる権利がある。当事者の義務でもある。

整理して述べる。日本人以外の一方の半島の歴史の当事者であった現在の韓国人の立場から見たとき、朝鮮王朝が大韓帝国に変わり、大韓帝国が滅びて統治機関が総督府だけになった三十数年間は何という国の歴史になるのかということが歴史教科書問題の干渉の根底にあると私は考えている。この時代に日本内地には二百万人を越える半島の人々が移り住んでいた。日本内地に住む人々は半島出身者も選挙権被選挙権があり、国会議員となる者もあった。日本の内地を含めて日本はそれまでの日本ではなくなり、半島もそれまでの半島ではなくなっていた。その三十何年間、

日本史と半島の歴史の時は是非を越え融合して流れたとみるべきである。

もしそこで、歴史の当事者の発言を基に歴史を編纂するとの方針に従って日本統治時代の当事者を一堂に呼び集めて半島史の編纂を試みたとする。日本統治時代の当事者は現在三つの国家に別れている。日本、韓国、北朝鮮である。この三国の人々は日本統治終了以後の歴史を経てそれぞれの過去についての解釈によってそれぞれの歴史を作り上げてしまっている。日本統治時代について日本人が述べる歴史が、もう一方の当事者である韓国人を代表する韓国政府の述べる歴史と一致するはずはない。北朝鮮政府に同じ時代の経験を述べさせても他の二つと一致しないのは当然であろう。

4-2 半島史の記述

半島には、三国時代、高麗、李王朝と歴代の王朝の正史を編纂、記述するという伝統があった。しかし、朝鮮王朝実録以後、現代に至るまでの半島の正史はどうなっているだろうか。韓国には国史編纂委員会があっても正史に値する半島史は未だ無い。強いて言えばかつての中学校高等学校の国定歴史教科書がそれであった。国定教科書が有るにも関わらず、国史編纂委員会が編纂した近現代韓国史はない。それは何故か。

建前はともかく半島の北半分を朝鮮民主主義人民共和国と称する「国」が統治している状況では、全半島の近現代史を正史として編纂記述することはできないであろう。それは当事者である日本も北の共和国も同様であろう。

その地域の前の統治者の時代について、その地域の統治を引き継いだ勝者が自己の正当性を示す歴史を書くという正史の意味からして、この地域には未だに誰もが認める正史を編纂記述するに足る勝者がいないということである。

4-3 誰が半島人か、誰が日本人か

当時朝鮮と呼ばれた日本統治時代の半島の歴史を自分の歴史として語る資格の有るものは朝鮮人であり、日本人である。では誰が朝鮮人であり、日本人であるのか。

それを語る為に実在の人物を挙げようと思う。

1970年代から80年代にかけて私が勤務していた韓国の大学の同僚で職場の先輩であったK氏は1930年代に東京日本橋で出生した。両親とも半島出身の朝鮮人であったが生まれたときの国籍は勿論日本人であった。豊かな家庭に育ち、創氏改名をせず、旧制中学を終えたところで解放を迎えたが、しばらくの間、自分は日本人だという意識が抜けなかったという。その後成長して韓国の大学を卒業してもK青年にとって日本語の文学や日本文化は自分の精神と人格の内部にあるものであった。その後、彼は日本に密航し立命館大学と法政大学で日本史（古代史）を専攻し、韓国に戻り大学で日本語と日本史を教えた。そんな彼にとって日本の古代史は高句麗や百濟、新羅が自国の歴史であるのと同様に、外国の歴史ではなかった。

日本統治の時代を生き日本人として教育を受け、自分は日本人である。日本の一部である、と思い成長して1945年以降、韓国民になった後も日本文化が自らの中にあるという人々は日本人である。そういう彼が自らの一部である日本史に何か言うのは当然であると私は考える。K氏のような人生を歩んだ韓国人は無数にいる。そういう韓国人にとって日本史は他国の歴史ではない。日本史に発言権がある人々である。発言せねばならない人々である。

同じく、当時の半島の統治に関わり、統治の当事者であった日本人は半島の歴史の当事者として半島の歴史に発言権が有り発言せねばならない人々である。

両国とも自身その時代を生きた人々の子孫も日本統治の時代を経て生まれて来た人々であれば互いの歴史について発言権がある。

5 結び（日本人にとって半島とは何か）

半島は時を越える一つの集団の歴史で括ることができない地域である。そこにはさまざまな集団が国を建て統治して来た。その様々な集団の中の一つが日本である。そして何十年にも渡って統治される人々と言葉や文化を異にする統治者として半島全体を直接統治したのは日本人だけである。^(注6) 私達日本人は半島に手を入れ、近

代化であれ、教育であれ、産業の進化であれ、住民の生活の決定的な変化となることを日本人の意思で行った。この統治時代を通して日本人にとって半島は他者と言えない存在となった。日本人が自覚するか否かはともかく、責任が生じると同時に発言権も生じた。現在の大韓民国建国論争も日本の統治時代の位置付けが、つまりは私達の過去の行動の位置づけが論じられているのであるから、当事者の日本人には大韓民国建国論争に参加して発言する権利がある。また義務もある。

日本の統治の時代を経て、日本も韓国も北朝鮮も生まれている。一組の夫婦がいて子供が生まれたとする。子供にとっては母方の先祖も父方の先祖も自分の先祖であろう。

注

(注1) 金富軾『三国史記』より

(注2) 近藤和彦『イギリス史10講』岩波新書2013

(注3) 半島における王が人々にどう捉えられているかを考えさせられる事例として日本の統治が終わった後の大韓帝国皇帝に対する国民の態度がある。1945年の時点で王を復位させて国の象徴にしようという勢力(王党)は皆無であった。ここには沢山の要因が考えられる。

一つには半島の王は王朝毎に姓が違う王が複数存在する相対的な存在であることが考えられる。朴、金、昔、高、王、李、その他、済州島には梁、夫、高という王達がいた。朝鮮王朝の李氏だけをというわけにいかないと言う人もいる。王は唯一無二の存在ではない。

(注4) 筆者が1970年代半ばに延世大学の韓国語教育機関(延世大学韓国語学堂)の授業で実際に経験した。

(注5) その後、韓国でも教科書検定制度が導入された。韓国の近現代史の教科書に偏向が見られるとして朴槿恵大統領は再び国定教科書に戻そうとしたが果たさず退陣した。

(注6) 楽浪郡など四郡は直接統治をしたが半島全土を統治したわけではなかった。

参考文献

- 01 『植民地がつくった近代』尹海東 2017 三元社
- 02 『モンゴル覇権下の高麗』森平雅彦 2013 名古屋大学出版会
- 03 『大清帝国と朝鮮経済』2014 山本進九州大学出版会
- 04 『古代朝鮮墳墓による国家形成』吉井秀夫 2010 京都大学出版会
- 05 『帝国日本と(満鮮史)』井上直樹 2013 塙書房
- 06 『近代日朝関係史』趙景達 2012 有志社
- 07 『朝鮮現代史の岐路』李景珉 2008 平凡社
- 08 『朝鮮の歴史』田中俊明 2015 昭和堂
- 09 『朝鮮史』武田幸男編 2014 山川出版社
- 10 『高麗時代史』金岸基 1985 ソウル大学校出版部
- 11 『三国史記』金富軾
- 12 『三国遺事』一然
- 13 『イギリス史10講』近藤和彦 2014 岩波新書
- 14 『島々の発見』J・G・A・ポーコック 2013 名古屋大学出版会